

## 市史講座第2回ミニレポート

5月19日(土) 第二回の講座が開かれました。

第1部：「中世の松江市域と橋」(講師:東京大学史料編纂所助教 西田友広先生)



西田先生は、「出雲国風土記」にみえる古代の渡しと橋と「大山寺縁起絵巻」にみえる中世の松江の風景から、宍道湖と中海の間に存在した湖(松江湖)にかかる橋について注目されました。

また、中世の絵巻に描かれたいろいろな橋の形状や、古文書に記された橋の維持の方法から、中世の橋がどのようなものであったかを紹介されました。さらに、尼子・毛利合戦の舞台となった「からから橋」について、たくさんの古文書を併せ読むことによって橋の位置を推定されました。講座では、中世の松江に架かる白渦・馬渦・からから橋の3つの橋の関連を指摘されています。



第2部：『出雲国風土記』と松江地域（講師：島根県古代文化センター 野々村安浩先生）



野々村先生は、はじめに和銅6年(713)諸国に風土記撰進を命じたことを記す『続日本紀』の記事を紹介され、『出雲国風土記』は、まとまって現在まで残る五カ国の風土記のなかでは、ほぼ完全な形で伝わる唯一の例で、成立年代・編者がわかるといった特徴を持つ貴重な史料であると話されました。

さらに各郡の記事の書き方には編者による調整の跡がうかがわれ、郷名起源伝承を比較した場合にも意図を持った編集がなされている可能性があることを指摘されました。ほかにも文体が漢籍の影響下にあることは何を意味するのか、人々が集まって宴する記事にはどのような実態が隠されているのかといった問題を投げかけられ、出雲国風土記研究の奥深い世界を示してくださいました。